

## 世界の支援にどう答えるか

湯澤 三郎 Saburo Yuzawa

(財)国際貿易投資研究所 専務理事

東日本大震災に遭われた皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

全てを剥ぎとられた巨大地震被災者の慟哭が、世界の人々の心を揺さぶっている。救援隊を派遣した 20 カ国・地域、義援金や物資を寄せた 45 カ国・地域のほか、支援を表明した国・地域は、実に 140 を上回るといふ。なかでも、被援助途上国を含め、各国の市民が自発的に立ち上がった例は、驚くほど多い。海外駐在経験者が、思いがけず多くの外国人から、電話やメールをもらったという話を随分聞いた。日本のために心をくだしてくれる人々の脳裏をよぎったのは、「あの日本人の国が大変だ」という、たざり立つ思いだったのではないか。

大抵の海外駐在員が着任して驚くのは、日本人に対する敬意を込めた信用の高さである。

「日本人であること」が信用のブランドになりつつあると言っても過言ではない。これは長年かけて官民が築き上げた貴重な「日本の資産であり国力」である。国際社会のモメ事になると、日本はすぐ「ではいくら出せばいい？」と札びらで済まそうとする、といった批判がある。しかし、身銭も切らない、言葉だけの誠意が虚しいことは、途上国が身に沁みて知っている。さらに、

---

日本の対途上国協力が誇るべき点は、匠の技の移転に汗をともに流した「忘れられない顔」の数々が、各地で語り継がれていることだろう。

一方、ビジネスの世界でも几帳面すぎるほどの誠実な取引スタイルは、日本人が信用を勝ち得る原動力になったし、海外駐在員の家族ぐるみの交流も現地コミュニティで日本への好感を培った。柔道・空手・生け花といった伝統文化普及に携わった人々が、世界でどれほど多くの友情と日本への好感を育んだことだろう。辛苦の末に信頼を勝ち得た日系移民という先人もいた。毎年1500万人を超える日本人海外旅行者は、「几帳面で礼儀正しく公德心が高い」と世界でもっとも評判がいい。

戦後、こうした日本人と直接・間接に触れ合った外国人の数は、優に億を超えるであろう。そうした普通の市民たちが「あの日本人」を思い出して立ち上がり、世界中に友情と連帯の輪が広がった。私たちはその友情にどう答えたらいいのだろうか。

被災者の打ちのめされた喪失感を目の当たりにした時、思い出されたのが欠乏と飢餓が日常化した、サブサハラなど最貧国の光景だった。世界が心を痛めている最貧国問題に、日本を挙げて力を合わせれば、必ずや新たな突破口が開けるだろう。これこそ創造力と追求を極める、日本らしい世界への恩返しにならないか。小回りの利く中小企業の技術開発力、効果的連携の見事さは他の先進国の追随を許さない。日本中にひしめくオンリーワン企業、ベストワン企業の潜在力を結集するプラットフォームさえできれば、最貧国の工業化にODAの新機軸を拓くことも可能だろう。

落花への哀惜の先には、実りへの希望が灯る。戦後最大の危機から生まれる日本発の革新が、農業を含め、世界に希望の光を投じる日は遠くないと信じたい。